The Prelude における太陽と月

添　田　　透

Wordsworth の *The Prelude* 13巻は落照の文学と云えよう。それは落照の美と静寂に溢れている。このことは *The Prelude* が回顧によるものであり，imagination の坩堝に溶かしたものを再生したことによるからである。即ち *The Prelude* 13巻の天地は Wordsworth の天地である。

> I had a world about me; 'twas my own,
> I made it; for it only liv'd to me,
> And to the God who look'd into my mind.
>
> (*The Prelude*, III, 142.)[1]

従って星辰草木ことごとく特有の意味を持つことは当然の理であるが，Wordsworth の詩人としての発展段階に呼応して自然物に対する彼の見方が変っていくことも又当然のことである。その結果，詩の上で扱われる自然物に質的変化が認められるとみるのが自然な帰結であろう。本研究は上述のことを太陽と月をとりあげ実証しようと試みたものである。この試みは同時に彼の詩心を究めうる一つの過程を実証し得ることにもなろう。

さて太陽と月は古今東西を問わず，詩人たるものは必ずとりあげた言葉であり，詩の対象となったものである。Wordsworth も論外でなく彼の作品中に太陽を295回，月を141回使用している。とはいっても，全部が凝結した意味を含んでいるわけでなく，急流の如くさっと彼の poetic mind に触れずに流れ去ったものもあれば，深淵の如く人を引き込む魅力を持ったものもある。これから論じようとするのは *The Prelude*（1805年版）の中に見出され

1) 以下文中の引用の詩は特にことわりのある場合の他は総て *The Prelude* 1805年版よりの引用。以下略して III, 142. の様に書く。

る太陽と月についてである。この作品の中には太陽が38回，月が16回出て来るのであるが，以下詩行を追って検討してみたい。

The Sands of Westmoreland, the Creeks and Bays
Of Cumbria's rocky limits, they can tell
How when the Sea threw off his evening shade
And to the Shepherd's huts beneath the crags
Did send sweet notice of the rising moon,
How I have stood, to fancies such as these,
Engrafted in the tenderness of thought ... (I, 594.)

これは Wordsworth 10才の時の体験の抽象的意義を考察したものである。彼はこの時既に unconscious intercourse とでもいおうか，無意識のうちに，天地創造の太古から存在する美としての月を見た場合，月に人間生得の本質に基く歓び，換言すれば霊妙な源から由来する喜びを感じたのである。これは知的理論づけのなされていない organic pleasure なのである。彼はこの詩行の中で，月が昇って来ることを大いに歓迎し，月光に輝く海面の一分一厘毎にこの organic pleasure を感取したと云っている。H. Grierson はここを美の意識についての purest expression であると云っているが確かに素晴しい詩行といえよう。[1] しかし，ここには知的なものはなく，子供なる故，意識的に解釈しようとした努力の跡もなく勿論 prophetic significance を与えようとした努力も認められず，唯 deep sensibility が加わったのみである。彼は力強い健康的な生命についての感覚と，自分より大きい崇高な，そして充実した力強い喜びに溢れた姿を本能的に表現したのであると解釈出来よう。次の

That Bed whence I had heard the roaring wind
And clamorous rain, that Bed whence I, so oft,
Had lain awake, on breezy nights, to watch

1) Sir Herbert Grierson: *Milton and Wordsworth*, p 163.

The moon in splendour couch'd among the leaves
Of the tall Ash . . .　(IV, 76.)

に見られる月も同じ系統に入る月と云えよう。ここは1788年の暑中休暇の時の描写であるが，Wordsworth の例の連想の働きにより Book I における少年時代（9才）の叙述にかえっているのである。この月も第二義的な，自然の一部としての月であり，月そのものを本質として捕えているわけでなく，pleasure of his boyhood の対象としての月であり，矢張り人間生得の本質に基く歓びを与えるものとして描写されている。月を凝視する彼の姿には少年時代の月に対する romance への彼の fondness を認めることも出来る。次の表現は対象としての太陽を美としては把握していないが，矢張り同系の本能的歓びを与えるものとしての例である。

Oh! many a time have I, a five years' Child,
A naked Boy, in one delightful Rill,
A little Mill-race sever'd from his stream,
Made one long bathing of a summer's day,
Bask'd in the sun . . .　(I, 291.)

ここは自然と人間とのけじめのつかぬような裸の野蕃人の如く渾沌たる無明の衝動の生活に，肉体的，動物的快楽を満喫していた幼い頃（5才）の経験なのであるが，強烈な夏の午後の太陽は「太古から存在する joy の源」でもあった。それ故少年の運動としての swimming に欠かせぬものであり，本能的歓びを与えてくれるものであった。太陽は Wordsworth に健康という肉体的歓びを与えてくれるゆえに有難かったのである。上述の詩行外に summer's day と bask'd の repetition があるのだが，Havens はこれは Hawkshead の気候と水が冷たい為当地の運動からは swimming は省かれていたことを説明していると記している。[1] 故に尚のこと彼にとり organic pleasure としての太陽が印象ずけられたのかも知れない。これ迄述べて来た

1）R. D. Havens: *The Mind of a Poet*, p. 297.

ことは，自由と外気を愛する子供が，人間生得の本質に基く歓びを自然から受けとるという彼の第一段階の自然観に基く太陽観，月観である。この段階に於ては，自然界に直面した時，見る，感ずる作用は働くが，一歩進んだ考える作用は働いていないのである。Beatty は Wordsworth のこの時期を特徴づけて，「人生における無反省の時期であり，経験と自然に対する意識的反応のないとき」と云っているが理解し得る見解と云えよう。[1] それがやがて自然に対する愛と関心の成長につれて，太陽と月を更に意識するようになっていくのである。勿論この場合でも organic pleasure がその為に無くなるというのでなく，基調としては可成りの位置をしめている。

And from like feelings, humble though intense,
To patriotic and domestic love
Analogous, the moon to me was dear;
For I would dream away my purposes,
Standing to look upon her while she hung
Midway between the hills, as if she knew
No other region; but belong'd to thee,
Yea, appertain'd by a peculiar right
To thee and thy grey huts, my darling Vale! (II, 194.)

彼は月を愛するようになったのは，月自身が美しいとか inspire するものであるというだけの理由からでなく，彼が例の Anne Tyson's cottage を彼の沢山な幸福な経験と関連している故に愛したのと同じ出発点からなのである。即ち彼が如何に自分の native region を愛したかは今更云う迄もないが，彼は「あたかも太陽が将に沈まんとする直前の光を愛しみ，ぐづつきながら彼の愛する山の上で別れの光を発している如く，自分も死の直前迄 native land を振り返って見るだろう」[2] と云っているように，彼の愛した native land の一部である valley に懸る月故に愛したのである。このことは太陽についても全く同じことが云えるのである。

1) A. Beatty: *W. Wordsworth*, p. 73.
2) *The Prelude*, 1850, VIII, 471.

Thus daily were my sympathies enlarged,
And thus the common range of visible things
Grew dear to me: already I began
To love the sun, a Boy I lov'd the sun,
Not as I since have lov'd him, as a pledge
And surety of our earthly life, a light
Which while we view we feel we are alive;
But, for this cause, that I had seen him lay
His beauty on the morning hills, had seen
The western mountain touch his setting orb... (II, 181.)

即ち少年の時に彼が太陽を愛したのは成人になってから愛したのとは質的に異るのであり，成人になってからは，地上の命の源としての太陽を愛したのであり，ここには評価を意識しての愛情があるが，少年時代には歓喜の唯中に何心なく目に触れたその時々の他の風景との関係における美しさの為に愛したのである。即ちこの頃は太陽，月の持つ概念的，知識的意味により愛したというよりは，彼が愛した風景との関係における両者の美を愛したのだと見てよい。incidental charm とでもいおうか附随的偶然的美を示す太陽，月に対する愛情と云えよう。そしてこの彼の太陽や月に対する愛は国を思い家を思う場合と似た感情で，強いものではあるが地味なものであった。いずれにしても，この段階における太陽と月は飽く迄附随的な美であり，Wordsworth に親しい環境の方が主であった。次行は上記のことをよく証明している。

... the sun in heaven
Beheld not vales more beautiful than ours. (I, 505.)

一般的に云って大人のは前述したように概念的知識的愛情で，評価を踏えてのものであるが，少年 Wordsworth のは直接的純粋経験からのものである。意識的愛からは詩は作れないであろう。以上第二段階の太陽，月観も未だ感覚美を通してのみ把握されているものであって知的関心，或は連想を併わぬ第二義的なものであり，第一段階の延長であると云えよう。換言すれば，第

一段階にあっては肉体的な動物的運動の感覚の満足が彼の関心の中心を占めていたのが，第二段階になって彼の関心の中心は自然に向い，より高等な視覚のもたらす感覚の満足へと向けられたのである。Beatty はこの時期を the age of feeling と呼んでいるのもうなずける。[1] やがて彼の自然観は，自己の感情を反映するものとしての自然という段階に達するのであり，太陽，月も Wordsworth の心的状況をあらわすものとなる。

> . . . we stopp'd
> And on a rock sate down, to wait for day.
> An open place it was, and overlook'd,
> From high, the sullen water underneath,
> On which a dull red image of the moon
> Lay bedded, changing oftentimes its form
> Like an uneasy snake . . . (VI, 632.)

これは 1790 年 Cambridge 大学の最後の年の夏休み前に若い友人の登山家 Robert Jones と Alps 旅行を企てた例の有名な Alps 越えの時の経験を述べたものである。彼等は Gravadona の町を過ぎ森の中に一夜を迷い明したのであった。dull red は不吉なものを感じさせ，uneasy snake は不安を如実に示している。changing は彼の心の動揺の反映と見てよいであろう。ここには自然への自己投射がある。Ruskin のいわゆる pathetic fallacy である。ここの描写は確かに unpleasant episodes の一つを示すものだが，*The Prelude* に record されている memorable episodes のほとんどは，このような状態のもとになされたものであることに我々は気付くのである。そして，その episodes の詳細な生々とした描写は，その出来事が如何に深い印象を彼に与えているかを示している。Evans も云うように，彼の真の偉大さは，*The Prelude* やその他幾つかの場所に発見される経験の独自さにあったのである。[2] 又 Marsh[3] のみならず大抵の Wordsworthian は彼が darkness に

1) A. Beatty: *W. Wordsworth*, p. 73.
2) G. T. Dunklin (ed.): *Wordsworth*, p. 122.
3) Cf. Marsh: *Wordsworth's Imagery*.

おいて彼の soul を養ったと云っているが，確かにこの場合も fear により起された神秘性，見知らぬ場所，不思議な音，不安な動き，迷ったとの観念は彼の詩心の abyss を動かしたと見られる。勿論この段階では unknown mode of being についての知的解釈は持っていなかったのであり，この場面の深い意味は後に Wordsworth が考え，判断した結果表出されるものである。いずれにしても，この場合の月は現実の不安の後に再び正路を見出せるとの未来を含めての彼の心的状況を示す月と見てよいであろう。

> . . . when the sun
> That rose in splendour, was alive, and moved
> In exultation among living clouds
> Hath put his function and his glory off,
> And, turned into a gewgaw, a machine,
> Sets like an opera phantom.　(X, 936.)

上記の詩行はフランス人の間には如何に精神の自由が少いかを悟ることに彼が失敗したことを述べた所であるが，生々とした太陽本来の所有する総ての function を太陽は失い，安ぴか物の単なる機械になってしまったと述べていることは自己の落胆した心の明らかな mouthpiece であろう。ここから Wordsworth が自然を人心を描く為の材料であると見る理論が生れ出て来るのである。

さて渾沌とした無明の衝動の生活においては動物的感覚の鋭さが目立ったのであるが，衝動は本能であり，本能は自然であるが，自然のままの姿が尊いわけでなく，彼のように稀な感覚力に恵まれていることは素晴しいことではあるが，自然の生のままの姿を無自省に受け入れるのが良いわけでなく，ある知的解釈が注入されだすのである。七巻において「広場の片隅に太陽と新鮮な空気を求めてやって来た乞食が，恰も太陽と空気を恐れるかの如く子供の上に身をかがめた」という所があるが，Wordsworth はそれを「言語につくせぬ愛情で自分の子供を見つめている乞食」と表現している。即ちここでは通俗的な，健康によい太陽というよりも，そこから人間愛を強く感じたの

である。このように人生智が深まり年令の円熟に従い自然と人間の関係について関心を抱き始めた Wordsworth は更に深い心境に入りつつあったと云えよう。この心境から見られる自然は幼い頃のように動物的喜びを与えなくはなったが，賢人よりも多くのことを与え教えてくれることを彼は知った。何故なら人間の心を貫いて存在する「実在，霊気，運動」は「落日の光にも，円い太陽にも，青い月」にも貫いて流れている筈である。自然と人間とが同じ霊，生命，神に統一されているとすれば，人間が自然から指導され，道徳的善悪も教えられない筈はないのである。この段階においては，太陽，月は最早や餘所物として人間と対立する存在でなく人間と交通する霊的存在となるのである。彼は静謐で祝福された情緒に浸る時，愛情が彼を導き，やがて肉体の，血液の動きが殆んど止み，肉体は眠り魂が生命あるものとなる。そして調和の力により鎮められた眠りと歓喜の力によって彼は事物の生命を洞察したのである。このような自然との交流により対象の核心に触れたのである。[1]

Scudding away from snare to snare, I plied
My anxious visitation, hurrying on,
Still hurrying, hurrying onward; moon and stars
Were shining o'er my head; I was alone,
And seem'd to be a trouble to the peace
That was among them. (I, 319.)

これはバネ付きの係蹄を肩に担いで山の上を鳥を捕えるために立ち働いた時の描写である。ふと見ると自分は唯一人で無数の星と月が冷たく頭上に輝いていたのである。彼は自分が自然の平和に対して迷惑を与えているように感じた。この時月は直接の非難者とはならなかったかも知れぬが反省を促す冷静さを彼に与えたことは確かである。***Nutting*** においても，「折り取った枝の後にぬっと頭を出している大空は自分を非難するようにみえた」[2] とあるように，ここには教育の一手段である叱責の役目を月が受け持っていると見

1) Cf. C. F. E. Spurgeon: *Mysticism in English Literature*, p. 61.
2) *Nutting*, 52.

てもよいであろう。このように Wordsworth は少年期に於ても既に霊的存在としての自然の severe intervention を感取していたのであるがこの時の自然はただ理論化がされていなかったのである。この種の宇宙に遍在する active spirit を示す好例としては *Tintern Abbey* に次のような描写がある。

And I have felt
A presence that disturbs me with the joy
Of elevated thoughts; a sense sublime
Of something far more deeply interfused,
Whose dwelling is the light of setting suns...
(*Tintern Abbey*, 93.)

彼は昂揚された思想の喜びで彼を動かす存在を，換言すれば遙か深く浸透した或る物の崇高な感じを感知したのである。それは夕日の光の中にも住み，思考する総てのものや総ての思考の対象を皆動かし，万象の中を流れる運動として，霊として受け取ったのである。ここにおいては，我々は明瞭に壮年期（壮年期と云っても *Tintern Abbey* における壮年期についての Wordsworth の考え方と *Intimations of Immortality* に於けるそれへの彼の考え方の間には相異があるように見えるが *The Prelude* の中の彼の意義深い神秘的体験に関係させて考えれば，両者は調和することが解る）に至った Wordsworth による自然についての汎神論的精神化を認めざるを得ない。このような汎神論は，自然のもたらす具象的感覚の世界の回想により得られたものである。Beatty はこの時期を，それのみが満足を与える所の思想により，より深く深遠な人生観を持つに至ったとの理由で思想の時期と呼んでいる。[1] 所で彼がこの段階において得た思想は，幼年時代のはじめの経験に少くとも潜在的な形で存在していたのである。即ち彼の神秘的経験が今迄述べて来た各時期を通じて一貫して根本的には同じ意味内容を持っていたのである。そして感覚的な面を持つ神秘的経験が，後の深遠な人生観となるべきものを潜在的には持っていたのであり，その意味で各段階は流通しているとも

1) A. Beatty; *W. Wordsworth*, p. 73.

云えよう。さて ***The Prelude*** の中で次のような所がある——「丁度花に働きかける時 gentleness をもってなす太陽は自然法ともいうべきものに従っている。未来という始末に負えぬ渾沌たるものを持つ花，それに優しく効果的に働きかける太陽，ここにも人為的に為し得ぬことをするある力が存在することを示している」[1] と。又他には善悪の判断を示す神的存在として，又人間界の humanity を愛する太陽として現われている。[2] しかしここで我々が注目せねばならぬことは，Wordsworth が精神的意味と自然美とを置き換えたのではなく，自然美に精神的意味を加えたのであって，自然美は自然美であることを止めはしないということである。唯彼の人生経験の深まりと共に人間の創造的理性の偉大さの認識により，太陽と月は彼の creative sensibility にプラスする主観（絶対我又は創造的理性）の働きにより更に光輝あるものになったのである。

Wordsworth にとり自然は彼が礼拝した神の神殿であった。それは彼に祝福を与えたし，人生の規範をうつし出すものでさえあった。そして彼はその大運動場で瞑想に，想像に適した環境を多く見つけたのである。

以上彼の幼年，少年，青年，壮年の段階を通して太陽と月にまつわる神秘的体験が彼の生涯に及ぼした影響の内容をさぐってみた。

次に太陽と月との関係を簡単に述べてみたいと思う。彼は「cavern（孤独を愛する気持ち）が私の心の中にあった」[3] と云っているように solitude を愛したことは周知の事実である。そしてこの cavern を中天の太陽は見抜けなかったと述べているが，それはこの時の太陽が孤独を知らなかった故であると解釈出来よう。彼は詩興の湧く simile として太陽が光を出す如く thoughts in a pure stream of words[4] が湧くと云っているが，この場合の太陽は silent beauty の状態にある setting sun と断っているほどである。歓喜とか，幸福とか，理想とか，美を示す太陽が Wordsworth を詩人とし

1) *The Prelude*, V, 375.
2) *Ibid.*, VIII, 147.
3) *Ibid.*, III, 246.
4) *Ibid.*, VIII, 464.

た最大原因の一つであったことは確かであるが，全体的に見て rising sun より setting sun に関する描写がいずれも memorable episodes であるということは，rising sun や中空の太陽には力勢が伴うのに対し，setting sun には静寂が伴う故，Wordsworth の詩心に適したからであろう。

From nature doth emotion come, and moods
Of calmness equally are nature's gift... (XII, 1.)

事実 *The Prelude* において同じ太陽でありながら rising sun より setting sun がより多く彼の心を引いたことは，rising sun に関しては10巻の870行，11巻の22行，13巻の4行ぐらいであとはほとんど setting sun に関するものであることからも理解出来る。例えば純然たる暑さを表わす太陽としては，2巻の97行，5巻の510行、8巻の?75行，12巻の229行ぐらいであり，1巻の74行，96行，110行，132行，452行，2巻の386行，6巻の11行，7巻の20行，8巻の117行，403行，564行は総て静寂を伴った美しさを表わす太陽の描写であり，しかもこれ等が全部 setting sun と関連しているのである。そして昼の太陽といえども平安の太陽としてのみ現われてくるのである。1巻の333行，3巻の452行，6巻の464行，7巻の223行がそれである。又太陽の光は遍在止まる所を知らぬ（6巻の604行）が，この遍在の光は彼をして異郷の身の孤独さをしみじみ感じさせた。

Where silent zephyrs sported with the dust
Of the Bastile, I sate in the open sun... (IX, 63.)

一方月は彼にとって太陽のように身近に感じないのであり，ここに神秘性を感じ畏怖を覚えるのである。神秘の月[1]である故静寂の月[2]でもある。そして静寂の月は孤独の月[3]と連なる。心の成長を得て，真なるもの，聖なるものを漸次感覚的に知的に覚るのであるが，是が前述の如く静寂の境において

1) See *The Prelude*, IV, 77. VI, 652.
2) See *Ibid.*, I, 597. VI, 100. VI, 636.
3) See *Ibid.*, IV, 372. IV, 410. XIII, 402.

得られたことを思えば月の偉大さを考えねばならぬ。Wordsworth は A. C. Bradley[1] も云ってるように，Solitary なものを見ると像想力が働いて詩興が澎湃として湧いた人なのであった。

愛を至上として愛なくしては人間は dust のようなものであるという Wordsworth，敬虔な心を持って礼拝する神殿が人の手になったものでなく，その深い意味を読みとる Bible が天地であるという Wordsworth にとっては太陽と月はその alpha and omega であるといっても過言ではないだろう。[2]

Milton の L'Allegro と Il Penseroso は Joy と Melancholy の対比の詩であるが，Milton が Il Penseroso の生涯の方を愛したのと同様に Wordsworth も詩作上の環境としては月並びに setting sun, declining sun に代表される神秘，静寂，孤独な Melancholy の世界を愛したことは何人も否定出来ないことであろう。

---

1) Cf. A. C. Bradley: *Oxford Lectures on Poetry.*

2) The Temple in which he worshipped most devoutly was still one not made with hands, the Bible in which he read the deepest lessons was still the Bible of the Universe, as it speaks to the ear of the intelligent and as it lies open to the humble-minded. (*The Prelude*, Introduction, P. XXXIV, by E. De Selincourt)